

新たな豚の改良増殖目標の骨子二次案

(注：前回の骨子案からの主な修正カ所を黄色でハイライト。)

1 改良増殖をめぐる現状と課題

養豚経営において、産子数などの繁殖性の向上は生産コストの低減のための重要な課題であるが、我が国の母豚1腹当たりの産子数は、近年微増傾向で推移しているものの、海外の豚改良の先進諸国を大きく下回っているところ。

その一因としては、各地域の改良機関や種豚生産者等がそれぞれの目的・ニーズに応じた独自の種豚改良を行う中で、繁殖性についての連携した取組が図られてこなかったという点が挙げられる。

このため、海外の先進的な事例にひけを取らない産子数が確保できるような純粋種豚を作出していくためには、遺伝率が低いとされる繁殖形質の能力向上を効率的に進める必要があり、開放型育種の導入や関係機関の協力体制を強化するなどの改良手法の見直しが必要。

一方、主として三元交配の雄として利用されているデュロック種については、我が国で求められている肉質の改良を進めてきた結果、一定の評価が得られている状況。

今後とも、産肉性については、消費者の多様なニーズに対応しつつ、特に食味の面で輸入豚肉との差別化が図られるよう、肉質の更なる改良を進めることが重要。併せて、生産コストの低減を図るため、飼料利用性の向上も必要。

また、国内の純粋種豚生産農場の減少にともない頭数も減少傾向にあることから、優良な純粋種豚の維持・確保を図っていく必要。

2 改良目標

(1) 能力に関する改良目標

国際化の進展等に対応した競争力のある豚肉生産を推進するため、海外の先進事例に負けない純粋種豚の繁殖能力や肉質を含めた産肉能力の向上を図り、特色ある豚肉の生産に向けた改良を推進。

① 繁殖能力

依然として1腹当たり育成頭数等の成績で海外の改良の先進的な諸国の種豚と大きな能力差が見られ、豚肉の内外価格差の大きな要因の一つとなっていることから、純粋種豚の1腹当たり育成頭数の向上に着目した改良を強化することにより、肥育もと豚生産用母豚の繁殖能力を更に高める必要。

② 産肉能力

1) 飼料利用性

飼料利用性の改善による生産コストの低減を一層推進する観

点から、引き続き飼料要求率の改善を図る。

特に、飼料要求率と1日平均増体量には一定の相関が認められることから、引き続き増体性に関する遺伝的能力の向上を図るとともに、飼料利用性に関する新たな指標の活用についても検討。

2) 産肉性

流通・消費者ニーズ等を踏まえ、ロース芯の太さについては、パークシャー種を除き、現状と同程度の水準を維持。

背脂肪の厚さについては、現状と同程度の水準を維持。

特に、交配用の雄として主に利用されるデュロック種については、1日平均増体量などの産肉性を向上させるとともに、差別化やブランド化に資するものとしてロース芯筋肉内脂肪の高い（概ね6%を目処）系統の作出・利用を図る。

表1：純粋種豚の能力に関する目標値（全国平均）

	品種	繁殖能力		産肉能力			
		1腹当たり 育成頭数	1腹当たり 子豚総体重	飼料要求率	1日平均 増体量	ロース芯の 太さ	背脂肪層の 厚さ
現在	パークシャー	9.0	51	3.3	706	30	2.0
	ランドレース	9.8	62	2.9	881	36	1.6
	大ヨークシャー	10.3	61	2.9	907	36	1.6
	デュロック	8.2	45	2.9	912	38	1.5
目標(平成37年度)	パークシャー	9.8	57	3.2	750	32	2.0
	ランドレース	11.0	69	2.8	950	36	1.6
	大ヨークシャー	11.5	69	2.8	970	36	1.6
	デュロック	9.0	53	2.8	1,030	38	1.5

注1：繁殖能力の数値は、分娩後3週齢時の母豚1頭当たりのものである。

注2：産肉能力の数値（飼料要求率を除く。）は、雄豚の産肉能力検定（現場直接検定）のものである。

注3：飼料要求率は、体重1kgを増加させるために必要な飼料量であり、次の式により算出される。

$$\text{飼料要求率} = \text{飼料摂取量} \div \text{増体量}$$

注4：飼料要求率及び1日平均増体量の数値は、体重30kgから105kgまでの間のものである。

注5：ロース芯の太さ及び背脂肪層の厚さは、体重105kg到達時における体長2分の1部位のものである。

表 2 : (参考) 肥育もと豚生産用母豚の能力に関する数値 (全国平均)

	1 腹当たり 生産頭数	育成率	年間分娩回数	1 腹当たり年 間離乳頭数
現在	11.0 頭	90 %	2.3 回	22.8 頭
目標 (平成37年度)	11.8	95	2.3	25.8

注：育成率及び1腹当たり年間離乳頭数は、分娩後3週齢時のものである。

表 3 : (参考) 肥育豚の能力に関する数値 (全国平均)

	出荷日齢	出荷体重	飼料要求率
現在	189 日	114 kg	2.9
目標 (平成37年度)	精査中		

(2) 体型に関する改良目標

能力の向上を支えるため、強健で肢蹄が強く、発育に応じて体各部の均称がとれ、供用年数が長く飼養管理の容易なものとする。

特に、肢蹄に関する実用可能な評価指標の確立・普及に向け、引き続きデータの収集・分析を進める。

(3) 能力向上に資する取組

① 純粋種の維持・確保

多様な消費・流通ニーズに応えた、肥育豚生産の基となる育種素材として多様な特性を有する純粋種豚の数が減少しており、その維持・確保及び育種実施機関等への安定供給のための体制整備・強化に努める。

一方、希少品種の活用や飼養管理方法等による差別化を図るための特色ある品種の維持・確保について、関係機関の役割分担も含め

て検証。

② 改良手法

斉一性を確保する観点から系統造成を基礎としつつ、特に、繁殖性に関する能力向上を図るため、開放型育種の導入も視野に入れ雌系純粋種豚の改良を推進。

また、遺伝率が低い繁殖形質等については、育種母集団を拡大し選抜圧を高めることが効果的であるため、独立行政法人家畜改良センター、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構、都道府県、民間の種豚生産者等の関係者が連携することにより、優良な改良素材を効率的かつ効果的に利用できる改良体制の構築を推進。

この場合、現在の種豚の遺伝的能力評価のほとんどは農場内評価にとどまっていることから、国内の優良な遺伝資源を最大限活用していくためには、地域間で種豚の血縁ブリッジ（注）を拡大し、広域的な遺伝的能力評価に基づく種豚の選抜及び利用を推進していく必要。

さらに、衛生面の確保を図りながら改良素材の広域利用を促進する観点からも、人工授精の技術向上やガラス化技術を活用した受精卵移植等の技術利用に努めるとともに、DNA情報を利用した育種改良の実用化に向けたデータ収集に努める。

注：血縁ブリッジ

信頼性の高い遺伝的能力評価を行うため、農場間で種豚や精液の導入・提供を行い、農場間で種豚の血縁関係を構築すること

③ 飼養管理

家畜疾病発生予防、まん延防止のため、飼養衛生管理基準の遵守の徹底について指導するとともに、農場HACCPの普及やオールイン・オールアウトの導入等の衛生対策の推進が重要。

また、飼養豚に遺伝的能力を十分発揮させるため、飼料設計の改善及び適切な飼養スペースや豚舎の環境等豚の快適性に配慮した飼養管理（アニマルウェルフェア）の周知とその普及を推進。

さらに、特長ある豚肉生産や一層の生産コストの低減を図るため、地域における特色のある品種の活用等によるブランド化等を推進するとともに、引き続きエコフィードや飼料用米の積極的な利用を推進。

特に、肥育豚の出荷日齢の短縮を図るため、品種等の特性に応じた改良面と飼養管理面での改善を通じて飼料利用性や増体性の向上等に努める。

注1：オールイン・オールアウト

豚の収容施設を空にして、新たな豚群を一度に導入して一定期間飼養し、一度に出荷する方式。豚群の出荷の度に、収容施設の水洗・消毒・乾燥を徹底することで病原体が減少し、豚群の健康維持、事故率低減及び生産性向上を図る。

注2：エコフィード (ecofeed)

「環境に優しい (ecological)」や「節約する (economical)」等を意味するエコ (eco) と飼料 (feed) を併せた造語で、食品製造副産物等の食品循環資源を原料に加工処理されたりリサイクル飼料。

④ おいしさに関する指標

消費者の多様なニーズに応じた肉質の改良を進めるため、おいしさの評価に関する科学的知見の蓄積に努め、指標化項目や評価手法の検討及びその簡易な分析手法の確立を図る。

3 増殖目標

豚肉の需給動向に即した生産を行うことを旨として、飼養頭数の総数は〇〇〇万頭（現在954万頭）とする。

(参考) 豚をめぐる情勢

1 豚をめぐる情勢

我が国の養豚は、食生活の多様化・高度化に伴い食肉需要が堅調な伸びを示す中、食肉の中でも消費量が多く、重要なたんぱく質供給源である豚肉を供給するとともに、流通・加工及び販売業者も含め裾野の広い産業として発展してきた。

豚肉の需給状況については、消費量が近年横ばい傾向で推移する中、国内生産も横ばい傾向で推移しており、その結果、国産シェアは50%をやや上回る水準で推移している。

生産については、飼養戸数が減少する中、家畜の改良の推進とともに、飼養管理技術の向上等による生産性の向上や省力化が図られ、併せて規模拡大が進展することで生産基盤の維持拡大が図られてきた。

また、近年、優良種豚の広域的利用を可能とする人工授精の普及が進むとともに、食品残さ等を飼料として活用するエコフィードや飼料用米の利用等による生産コストの削減やブランド化等の取組も行われている。

経営形態としては、繁殖から肥育まで自農場で行う一貫経営が多数を占める状況ではあるが、疾病のまん延防止等の観点から、繁殖や肥育等の農場を分離し飼養管理する事例も見られる。

また、近年では、ふん尿処理等の環境保全対策や各種疾病に対する衛生対策が一層重要となってきており、さらには、消費者の食の安全に対するニーズへの対応が求められている。

今後、WTO、FTA交渉等、国際化の一層の進展が予想される中で、より一層の生産コストの低減とともに、消費者の多様なニーズに応えた高品質化等への取組が求められている。

2 改良をめぐる情勢

(1) 改良事業の概要と変遷

豚の改良は、昭和30年代に、産肉能力を検定する全国統一基準が定められ、国、都道府県等は集合検定施設を各地に設置し、産肉能力に関する改良を進めた。

昭和40年代以降、それまでの純粋種豚を肉生産用の豚（肥育豚）として利用する生産方式から、ランドレース種、大ヨークシャー種、デュロック種等の交雑豚（主に3元交雑豚）を肥育豚として利用することが一般的となってきた。

また、多頭飼育化に対応した斉一性の高い高品質な豚肉生産が求められるとともに、外国で改良された種豚（ハイブリッド豚（注））の導入も増加した。

このため、国や都道府県等において、従来の個体の改良ではなく閉鎖集団としての改良を行う系統造成事業が開始され、主に国は雄型系統（デュロック種）、都道府県等は雌型系統（ランドレース種及び大ヨークシャー種）との役割分担の下、平成26年までに全国で88系統を造成した。

一方、種豚生産者等においては、国内外から優良な育種素材豚を導入しながら選抜を繰り返す手法で、優良な種豚群の造成に取り組んできた。

なお、種豚の改良手法である産肉能力の検定としては、当初、産子の成績を用いて検定する後代検定が行われていたが、検定期間の短縮化が求められたことや検定機器の開発等により個体自身を検定する直接検定への移行が進んでいった。

さらに、昭和50年代から60年代までにかけて、全国的に豚の疾病がまん延したことから、現在では、集合検定施設における検定方法ではなく、自己の農場で検定する現場検定方式が主流となっている。

また、平成12年から、飼養環境による影響を排除し、豚の遺伝的な能力を正確に把握することを目的とした遺伝的能力評価が開始され、平成26年までに、繁殖形質に関し、バークシャー種については全国評価が、デュロック種、大ヨークシャー種及びランドレース種については、沖縄県内、群馬県内、栃木県グループ内の農場における地域内評価が開始されたところである。

(2) 成果

① 純粋種豚

ア 繁殖能力

1 腹当たり生産子豚の育成頭数は、肥育豚生産の交配用の雌として主に利用されるランドレース種において、過去20年間で9.5頭から9.8頭と微増傾向で推移している。

イ 産肉能力

1 日平均増体量は、肥育豚生産の交配用の雄として主に利用されるデュロック種において、過去20年間で840gから912gと増加傾向で推移している。

一方、背脂肪層の厚さについては、薄くする方向で改良されてきたが、我が国における脂肪の「おいしさ」に対する消費者ニーズ等もあり、近年、横ばい傾向で推移している。

② 肥育もと豚生産用母豚の繁殖能力

1 腹当たり生産頭数及び分娩回数は、増加傾向、育成率は横ばい傾向で推移しており、この結果、年間離乳頭数については、過去20年間で18.2頭から22.8頭へと増加傾向で推移している。